

みやぎボイス 2016 後半テーブルC
「震災の伝承・風化 次の震災に向けての取組」記録
(記録作成 みやぎ連携復興センター 石塚直樹)

■登壇者

佐藤 研 一般社団法人みやぎ連携復興センター 事務局次長
脇坂隆一 国土交通省東北地方整備局 東北国営公園事務所長
川島秀一 東北大学災害科学国際研究所災害文化研究分野 教授
佐藤翔輔 東北大学災害科学国際研究所災害アーカイブ研究分野 助教
佐藤正実 特定非営利活動法人 20 世紀アーカイブ仙台 副理事長
藤間千尋 公益社団法人みらいサポート石巻
佐藤尚美 北上インポルブ
寺島英弥 河北新報社

■ファシリテーター

福留邦洋 東北工業大学 准教授

■企画者・コーディネーター

石塚直樹 一般社団法人みやぎ連携復興センター 事業部長

敬称略

福留)では、まだいらっしゃっていない方もいますけれども、時間になっておりますので始めたいと思います。これから午後、どうぞよろしくお願ひします。ここのセッション、テーブルCでは、「震災の伝承・風化・次の災害に向けて」というテーマで行います。今日お集まりの皆様は、進行形でですね、この震災の伝承・風化ということに対して、様々な形で取り組んでいらっしゃる方かと思いますが、地域によって、取り組みの仕方は様々かと思ひます。この先に対しての心配や懸念などもあるかと思ひますが、そういったところを最終的に共有できればと思ひております。最初に、今日の全体の流れについて、このセッションを企画したみやぎ連携復興センターの石塚さんから、お話いただければと思ひます。

石塚)はい。では皆様、改めまして宜しくお願ひします。今福留先生からご紹介を頂きましたが、今回のテーブルの企画をさせて頂きました。どんな狙ひがあつて、皆様にお声掛けさせて頂いたのかというところを、私からお話させて頂けたらと思ひます。

登壇者の皆様には、事前に企画書をお送りいたしました。わかりにくいというご指摘も頂きましたが、修正をかけてきましたが、このテーブルは震災の、ここでは敢えて復興と入れておりますが、震災復興の伝承や風化、次の災害に向けた取組が、①今どの様な状況にあるのか。②これまでのところでどんな可能性を生み出し、また課題が見えてきたのか。③

そして今後、どうあるべきなのか、について、整理・共有する時間としたいと思ひます。議決をする場、ではありませんし、いろんな考え方や取組がありますので、その全体像を共有したいと思ひます。言い換えますと、①と②はどちらかというところまでを振り返る、③はこれからを考える、という様な2つの構成となります。

今回登壇頂く皆様は、立場から分けてみますと、まず官からは、国土交通省脇坂さんにお越し頂きました。産からは、河北新報寺島さんにお越し頂いております。学からは3名お越し頂きました。進行頂いている東北工業大学福留先生と、東北大学から川島先生と、佐藤翔輔先生にお越し頂いております。民からは4名お越し頂いておりますが、みらいサポート石巻の藤間さん、WE ARE ONE 北上の佐藤尚美さん、20 世紀アーカイブ仙台的佐藤正実さん、みやぎ連携復興センターの佐藤研さんに参加頂いております。

私の思いこみもあるかと思ひますので、皆様から訂正を頂けたらと思ひますが、空間軸で今回のメンバー構成を見ますと、石巻のプロジェクトに関わられているのは、脇坂さん、佐藤翔輔さん、藤間さん、佐藤尚美さん、それぞれいろんな立場で、石巻の震災伝承・風化を見られているのではないかと思ひます。仙台の震災伝承に携わられているのは、主に佐藤正実さんと佐藤研さんになります。川島先生は各地をご覧いただいているかと思ひますが、気仙沼のことを、震災以前からご存じではないかと思ひますし、寺島さんには宮城だけではなく、他県のことも含めて、こういった取り組みの全体像を俯瞰してご覧になられていると思ひます。

もう一つ、時間軸で今回のメンバー構成を見ていきたいと思ひます。2011 からの5年を振り返り、今後の5年やその先を考えることがメインではありますが、その際に東日本大震災だけでなく、1995 年以降の国内の大規模地震災害や、より以前からの三陸の津波をはじめとした災害の経験を、本日の主題ではありませんが、参考としてどのように捉えられるか、ということも含めていきたいと思ひます。明治三陸地震や昭和三陸地震については川島先生、1995 年の阪神淡路大震災以降については福留先生や、佐藤翔輔さんがよくご存じなのではないかと思ひます。それ以外の皆様につきましては、東日本大震災以降をメインに、様々なご意見を頂けたらと思ひます。このような構成で、お送りをしていきたいと思ひます。それでは、進行の福留先生にお戻し致します。

福留) 今回の企画の狙ひ等は企画者の石塚さんからお話があつた通りですが、とはいってもまあ皆さんお話ししたい事もあるかと思ひますので、あくまでも大きな流れと言うことでご理解を頂けたらと思ひます。また後程議論になったときに、何をどういう風に伝えるか、また皆さんが関わっている取組につきましても、目的と手段があるかと思ひます。伝承や風化を防ぐこと自体が目的であるのか、またひょっとするとそれは手段であつて、もっと先に目的があるのではないかというお考えもあるのではないかと思ひますので、その辺りのお考えがあれば、ご披露頂けたらと思ひます。最後にもし可能であれば、震災伝承、風化を防ぐというのは、今回の直後の大きな被害であつたり、これは私個人の考えかもしれ

ませんが、今進行している復興の中で起きていることなどをきちんと残していく、伝えていく事が、次の災害に非常に関係してくるのではないかと思います。そういう意味では、今被災地で生きていらっしゃる方、前に歩もうとしている方にとつての、震災の伝承・風化を防ぐということは何であるのか、そのあたり特に、現場で関わっている皆さんなりに、お考えがあれば、述べて頂ければと考えております。長い様ですが短い時間になるかと思えますので、なかなか最後まで行きつくかどうかわかりませんが、どうぞよろしくお願ひします。

それでは、最初に初めての顔合わせの方もいると思いますし、フロアへの紹介も含めて、簡単に自己紹介と、このようなことに関わったいきさつを含めて、おおよそ大体5分くらいを目安に、お話し頂ければと思います。最初の一巡目は、この座席通りということでよろしいでしょうか。早速で恐縮ですが、佐藤正実さんからお話し頂けますでしょうか。

佐藤正実) みなさんこんにちは。NPO法人20世紀アーカイブ仙台の佐藤と申します。どうぞよろしくお願ひします。それでは自己紹介を兼ねて、現在の、またはこの5年間の活動をざっとご紹介させていただきます。

20世紀アーカイブ仙台という名前の通り、20世紀をアーカイブするということで活動を始めたんですが、震災後はですね、市民から写真や証言を集めて、それを記録するというところを取り組んでまいりました。アーカイブというか、写真素材等をどう活かすかということ活動を基本としてきたんですけども、このうち、3つだけご紹介をしたいと思ひます。まず1つめは、3月11日はじまりのごはんという取組です。これは、いわゆる震災後の、大手のメディアの皆さんが撮られた、被災地の生々しい写真だったり映像だったりではなくて、一般市民の方々の日々の生活、震災後の生活というものを、いかに震災というものを自分事にするのか、ということの一つのテーマとして取り組んでいるものです。なかなか自分のこと、生活のことを語る機会が少なくなっている中、震災後、初めて食べたのは何だったのか、という、写真を元にして食について語ってもらおうということで、実は食べたのはいつなのか、何を食べたのかという、そういった震災後の生活というものを明らかにしてくるということがわかりました。

例えば、3月12日に七輪と鍋で炊いたご飯、茶碗洗いをしなくても済むように、ラップを敷いて、ご飯を炊いている様子の写真があります。これを撮った時のいきさつなどを聴きながら、その生活ぶりを洗い出してみる、ということと同時に、話をする機会をつくることを目指しました。と同時に、写真を提供してくれた人だけではなくて、それらを誰が撮ったのか、いつ撮ったのか、のキャプションだけを残し、せんだいメディアテークおすれがないためにセンターさんと協働で実施した事業になりますが、これを館内に張り出して、来場者に自分の体験談というものを付箋に書いて張ってもらうという取組をやりました。例えば先ほどのごはんの写真なんかは、ラップについて反応されたり、ご飯の炊き方、おばあちゃんの知恵袋だったというような話をされたり、というような直接的な意見だった

り、またはコンビニエンスストアが24時間365日空いていて当然だったところが空かなくなることによってどんな生活になったのか、ということが浮き彫りにされたりと、そういった震災後の日常生活というものを改めて見てみよう、ということです。PRになります。今日の夜12時過ぎに、日本テレビ系列で30分の番組があるので、もし良かったらご覧ください。

もう一つは、震災前と現在の定点撮影です。震災前のまちなかの様子というものをもとに、現在の様子写真を撮って見るのですが、これは撮影したことを目的とするのではなくて、それをもとに地元の方々に写真から震災前の様子を語って頂く、または次の写真になりますが、例えば荒浜という昭和時代の写真ですが、こういった写真から、例えば閑上と仙台港には港があるんだけど、荒浜には港が無い。エブリガッコと言われますが、波を切って漁に出る。そして漁が終わったら戻ってくるんだけど、港が無いので地元の方々が一緒になって船を引き揚げる、ということをやりますね。そういったことを、震災前の、また元々のまちなかの生業をご紹介してもらうことで、県外から来る方々、思い出ツアーに参加してもらう方々に、このまちがどんな生活をしてきたのか、このまちの特徴は何なのかということを知って頂いて帰ってもらおうという、そういったことを、20世紀アーカイブが主体と言うよりは、地元の荒浜再生を願う会さんだったり、それから海辺の図書館さんであったり、そういった皆さんと一緒にツアーをつくっていく、ということをやっております。ここにも、いくつか課題や問題点、今後こういう風に取り組まなければいけないなあということも見えてきておりますので、それはまた、お話しできればと思います。以上です。ありがとうございました。

福留) それでは続きまして、脇坂さんの方からお願ひします。

脇坂) はい。国土交通省の脇坂でございます。私は実はみやぎボイスは三回目になるわけですけれども、これまでではどちらかというと、復興まちづくりについて、公務員の立場で喋る役割でした。というのは、私は震災直後の7月に東北地方整備局に霞ヶ関からまちづくり担当ということでできましたので、ずっと防災集団移転だとか区画整理だとか、また下水道や公園の復旧だとか、そういったことをずっとやってまいりましたので、みやぎボイスと言えば、住宅やまちづくりだと思ってまして、まさかこんなテーマで呼ばれるとは思ってなかったということです。まちづくりを担当しながら公園の担当でもありましたので、いろんなところで復興の記念公園、メモリアル公園の計画がありました。その中で特に大事な所は、国も直接乗り出して計画づくりしていこうというような話がございまして、岩手県では一番被害が大きかった陸前高田市の高田松原、宮城県では最も被害が大きかった石巻市の南浜の公園づくりについて関わることになりました。まちづくりの計画自体は、最初のセッションにもありましたけれど、市町村が国や県の支援を受けながらつくるのですけれども、どうしても実際被害があった低平地、産業として利用できる場所は良いの

ですが、なかなかそうでないところは公園にするという計画が結構ありまして、その公園にするにあたって、亡くなった方の追悼、また教訓の伝承を一緒に出来ないかという話がありました。政府が出した復興構想七原則の第一番では、失われたおびたしい生命への、追悼と鎮魂こそ、生き残った者にとっての復興の起点である、とあります。鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者によって科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信するということが、実は復興原則の1番はじめに言われております。と言いながら、そういった組織があまり無いということが問題でありまして、私も国土交通省の1機関の担当としてこの役割を担っているつもりでございます。二年前の10月なんですけど、東日本大震災からの復興の象徴となる、国営の追悼記念施設をつくるということが政府で正式に決まりまして、追悼と鎮魂、また記憶と教訓の伝承、また国内外に向けた復興に対する発信のために、陸前高田市、石巻市に国営追悼記念施設をつくるのが正式に決まって、私の今の事務所も出来たわけでございます。施設の目的、場所、概要でございますが、地方公共団体がつくる復興記念公園の中に、国営での追悼記念施設、丘や広場等をつくることとなっております。32年、震災10年を目標につくるということになってまして、今設計を行っております。これが陸前高田の高田松原ですが、奇跡の一本松があって有名になったところなんです。その場所に国営追悼記念公園をつくるということで計画を進めております。今年度中に、3月中にこの計画のちゃんとしたものが外に出る予定なんですけれども、考え方としては、道の駅と一体として、津波が起きた海の方向に軸線をつくりまして、道の駅と一体として震災と津波の伝承館と物販施設をつくり、真ん中の広場を追悼の空間にする、そういった設計を進めているところでございます。今日はどちらかというとみやぎボイスですので、石巻の話もあるかと思いますが、石巻では日和山の下の方南浜地区に公園をつくるということが復興計画で決まっています、その真ん中に国営の追悼記念施設をつくるのが決まっております。これは何が難しいかと言いますとですね、もともと町であって、そこに多くの方々の暮らしがあった跡地を、防災集団移転事業で買収して公園にする、という事情でして、普通は宅地は分譲したらまちづくりは終わってしまうのですが、それをさらに買い戻して公園にするという逆方向の様な事情ですので、大変難しいところがございます。地元の方々の様々な意見交換をしながら形をかためている最中なんですけれども、追悼と鎮魂がやはり大事になります。400人も亡くなった場所ですので、それをどうデザインに埋め込むかというのは難しいところがございます。またそこでの人々の50年以上の生活や、震災の教訓をどう伝承していくのかも課題であります。これは今県や市と一緒にしながら、復興庁からもお金を頂きながら、住民の方々とも意見交換をしながら、かたちを作っているところです。三月には委員会を開催して、設計概要をオープンにしていく予定です。私からは以上でございます。

福留) どうもありがとうございました。それでは、佐藤尚美さん、宜しくお願いします。

佐藤尚美) こんにちは。石巻の北上町から参りました、住民任意団体 WE ARE ONE 北上の佐藤と申します。今日は宜しくお願いします。私たちは、震災後に立ち上がった団体でして、震災後当初、地域にお店が無くなったということで、お店を仮設で設置して、その後、復旧・復興の中での流動的な課題の解決を、ちょくちょくお手伝いするということから活動をスタートしたんですけども、その後に復興支援員の制度が北上町にも入りまして、私は今年で3年目になるのですが、半分は復興支援員の立場で地域で活動しています。復興支援員のことも含めてお話しすると、活動の2年目からは復興支援という枠組みから少し抜けて、被災した地域の、北上町は細長くて、被災した地域と被災していない地域をはっきり分かれている地域なのですが、被災した地域と被災していない地域を全部ひっくるめて地域づくりという格好で、活動をしてきました。昨年8月に、3回目となる白浜海水浴場の海開きを行いましたけど、そういった地域でのイベントを復興支援員の活動として行ってしてきた中で、今後は地域福祉や地域運営、そういったところが今の地域に一番必要ではないかと考えております。ただその中でどうしても官民協働というところがなかなかうまく行っていないので、そこが今一番大きな課題かなあと考えています。たぶんこのテーブルに呼ばれたのは、石巻市のまちづくり交流館北上館という市の秘書広報課が管轄となりますが、市の情報を住民に提供しようといった施設が出来るんですね。たまたま私たちの拠点の隣にその施設ができるということもあり、私たちの方で受託して運営をすることになりました。震災の伝承・風化は私たちもずっと気にはしてきていたんですけど、正直今までここにあまり積極的な活動はしてこなかったんですけど、私も復興支援員をやっていて、そろそろ小学生も震災の記憶がほとんどない子たちが入ってきているのを、ああもうそういう風になっちゃったんだというのをリアルに感じたので、これから取組んでいかなきゃならないなと感じていました。まちづくり交流館を活用して、これまでの5年間のいろんな支援のスキームをきちんと整理して、記録する作業が今まで北上では出来ていないので、そういった部分を整理していきたいなと思っています。最終的には地域福祉、地域運営に住民の声をきちんと届けて、これからの若い世代の人たちに良い仕事を生み出すということを使命にしています。どうぞ今日は宜しくお願いします。

福留) どうもありがとうございました。では続きまして、藤間さんから宜しくお願いします。

藤間) はい。皆さんはじめましての方も、いつもお世話になっている方もいらっしゃいますが、どうぞよろしくお願ひします。みらいサポート石巻という団体から来ました、藤間と申します。今ほどお話頂いた佐藤尚美さんと同じ石巻ではあるんですけども、石巻はご存じの通りとても広いので、私の方はどちらかというと石巻駅に近い中心地といわれているところで活動しています。私自身はボランティアで石巻に来て、そのあと2012年

10月石巻に移住して、四年半くらいになります。その間、震災伝承プログラムにずっと関わり続けていることもありまして、ここに呼んでいただいたのかなど思っております。私自身は被災者ではありませんので、私自身が語り部活動をするということではないんですけれども、語り部プログラムの開催・参加を希望される方と、地域でご案内をしても良いですよという方の間に立って調整活動をするというのが、私の大きな仕事になっています。震災の語り部ということで、部屋の中で語り部さんのお話を聞いている様な写真がありますが、当団体は最初このスタイルからプログラムがスタートしました。元々はボランティアで外から来た人たちが、2日か3日の滞在で、地元の人とほとんどお話をしないで帰る現状にあったのを、私たちの団体は地元のスタッフが当初多かったの、地元のスタッフが、自分たちがどう被災したのか、どのように感謝をしているのかの思いを伝えるために、ボランティア活動が終わった後の夕方に、車座になって会を開くというところから始まったので、私たちの震災の語り部活動は部屋の中でゆっくりお話を聞くという形から始まりました。その後ですね、ボランティア活動は出来ないけれど、お土産などをたくさん買って経済的な支援をしたいという人たちも受け入れてほしいという旅行会社からのご相談があって、もちろんどうぞということを受け入れると、今度彼らは外を見ていないので、外を案内してほしいという話になって、車中案内と言うプログラムがスタートしました。その流れの中で、次に出来たのが、防災まちあるきというプログラムです。2014年の3月から、私たちは1つのアプリを無料公開しています。石巻津波伝承ARアプリと言うんですが、このアプリを無料公開して、震災前や震災直後の写真ですとか、工事現場であれば未来の絵などを、いろんなところから頂きながらアプリに入れて、見て頂ける様にしています。震災後もちろんまちが綺麗になるのはあたりまえすし良いことですが、ふらっと来た人たちが、案内人がいなければここでどんなことが起きたのかがわかりづらくなるという中で、アプリを見てもらいながら街を歩ける様なプログラムをつくり、個人でアプリをダウンロード頂いてもある程度歩けるようなプログラムをつくらうということで、2年前から公開しています。そしてそれを使ったまちあるきプログラムを運営しています。最後に、語り部と歩く3.11というプログラムがありますが、これは小学校の先生からの強い希望で、大きな部屋で150人とかの生徒に一人の語り部さんが話してもなかなか子どもたちに伝わりにくいので、どうにか小さなグループに出来ないかと言う相談を頂きまして、それで語り部さんが被災した場所の周辺を一緒に歩いたりするプログラムを開発しました。これは小中高校生のみを対象としているプログラムで、去年くらいから修学旅行などで利用して下さる方が増えているプログラムであります。私たちのプログラムは、毎月の統計をとると、基本的には利用者は増えている状況にありまして、小中高校生の割合が少しずつ増えて居まして、今全体の23%くらいは小中高校生が占めている状況にあります。最後なんですけれども、私たちはプログラムのほかに、2つの施設の運営をしています。2014年3月に、最初は小さくはじめましたつなぐ館といいまして、震災のことを、後世や、時間軸だけではなく、震災を体験していない方たちへ伝えていきたいという思いから、つなぐと

いうことばを使い、閉館しています。そして去年の4月に、石巻市の復興まちづくり情報交流館や、地域の新聞社がつくっている石巻ニューゼンさんという施設の近くに移転して、3館が連携して出来る様になっています。それとともに、先ほど脇坂さんからもお話があった国立の記念公園が出来る南浜に、市から土地を借りまして、南浜つなぐ館を昨年11月に完成させています。この地域に住んでいた方々の記憶を集めたりですとか、どんなふうに避難をされたのかを共有する避難経路の聞き取りのプロジェクト等を少しずつ始めていますというところです。以上になります。ありがとうございました。

福留) どうもありがとうございました。それでは、佐藤翔輔先生、どうぞよろしくお願います。

佐藤翔輔) はい。半分の方ははじめましてです。東北大災害科学国際研究所から参りました、佐藤翔輔と申します。今、佐藤三人目ですけれども、この円の中に佐藤四人おりますので、佐藤翔輔でございます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。尚美さん、正実さん、研さん、翔輔でございます。よろしくお願います。これ言うと結構うけるんですよ、最初(笑)。それでは、お手元の四つ切の資料をご覧ください。一応、私は研究をしている者ですので、一貫して研究する、科学するという立場から、震災伝承に携わらせて頂いています。震災伝承を、災害科学からアプローチするというテーマで、お話をさせて頂きます。これはつかみでご覧になって頂きたいのですけれども、今、我が国になる、震災のミュージアムですとか、アーカイブの場所をプロットした地図になります。東日本大震災の被災地をご覧になって頂きたいのですけれども、緑一色です。他の被災地には一番の特徴は、語り部さんやガイドさんが、異常に多いというのが、この東日本大震災の特徴です。こんなことを可視化した上で、こういった取り組みをサポートしなければいけないんだということで、これまで研究してきました。実は、元々のバックグラウンドが情報系なもので、情報関係から入ることを最初はさせて頂いております。今ほど藤間さんの報告で紹介いただきましたアプリケーションですけれども、つくったのはもちろんみらいサポートさんですが、それが本当に効果があるのかどうかの検証をお手伝いさせて頂いたり、東松島の図書館さんがされている、まちなかにあるアーカイブの活用、名取の観光協会さんがされている、カッコいいスマートグラスと言って、現地に行くとき過去の映像が投影されるというものですが、そういったものの効果を検証することのお手伝いをしております。左上の写真は、これもみらいサポートさんになりますが、語り部さんたちがいらっしやる勉強会で、こういうことが災害の常識ですよとか、こういう風にするのもっと良いですよ、というようなことを、お手伝いさせて頂いております。最近もつばら一番力をいれてやっていることなのですが、次にご紹介される川島先生と一緒させて頂いているのですが、碑文とか、口頭の伝承とか、震災遺構とか、あと歌とか、朗読とか、このあと川島先生が紹介するお祭りとか、いろいろな伝えるもの、私は津波伝承地メディアと呼ばさせて頂いてい

ますが、これらについては、どれだけ減災に寄与しているか、人的被害を無くしているか、数値的な根拠というものは無かったですね。こういったことを数値的に評価できるように、調査研究を進めております。先日、津波碑と、津波に由来する地名については一定の効果があつたのではないかとする見解をお示しして世に出してございます。次は自分の中では一番比重を占めていて苦しめられている事なのですが、2つの大きなプロジェクトを両輪でやっております。これが実は石巻でさせて頂いている事なのですが、右側から行きますと、場づくりと書かせて頂きました。石巻地方でつくる、震災学習の協働事業体制を、みらいサポートさん、脇坂さんらとつくっております。石巻全体、北上等も含むと思えますが、現状を簡単にまとめております。左側の写真三枚は、ガイドさんや語り部さんや展示の写真なんですけれども、実は東日本大震災では、この石巻が被害規模最大の被災地でございます。そういった関係で、ガイドさんや語り部さん等が一番多いのも石巻ということになります。一方で、右側の絵をご覧になって頂きますと、限りあるところでしか集計していないのですが、年々利用者が減少してしまっているということがわかりました。一方で下に、写真が二枚ありますが、これは阪神淡路大震災と、中越地震の被災地ですが、数字は出していないのですが、利用者は横ばいだったり、むしろやや上昇しているんですね。これはちょっとおかしいなと、何でここだけ減少するのかなということに疑問をもちまして、いまご一緒させて頂いております。その現場をつくるために何をやっているかと言いますと、先ほど申し上げた通り、協働事業体制をつくるということになります。複数の自治体さんがいらっしゃいますので、何とか良い所を連携し合いながら、相乗的に利用者を増やすことが出来ないかとやっていることがこれになります。左側の写真は先進事例である神戸や中越を拝見しに行き、右は拝見してきた結果を持ち寄って、課題の全体像やビジョンをつくりあげていただくことを、脇坂さんにも藤間さんにもご参加いただいで、させて頂いております。先ほどお示した両輪の左側となるのですが、これは全くの研究側のアプローチということになります。川島先生ともご一緒させて頂いております。震災伝承は良いといわれていますが、それがいかに良いのか、科学的根拠に基づいていなければいけないと、意識してやっております。そういった中で、研究所は学際研究組織を謳っております。私は情報ですが、川島先生は民族学ですし、心理、博物館、観光系など、その他もろもろの先生方とご一緒させて頂いて、いかに人を呼び込むか、いかに帰ったあとに、その人の気持ちを変えることが出来るか、ということ、指標を持って、必ず効果が出るんだ、持続的なんだということを目指すために、今バックヤードで仕掛けをつくってみらいサポートさんなり、石巻市の方々にお試し頂いている、という段階になっております。その一環の一つですが、震災の教訓を伝えるためのデータベースを二つ公開しております。なんで二つあるかは、もし機会があれば後でご紹介したいと思います。ウェブサイトが教訓がご覧になれるデータベースをつくってご提供させて頂いております。これが最後ですが、本学に名誉教授で首藤先生という方がいるんですけれども、首藤先生の研究で、震災の伝承なんて30年越えられないんだという研究結果がございます。それに僕ちょっとム

カッときたので、じゃあ30年を越えてやろうじゃないかと思ってやっております。それで、語り部さんの30年を追うということを見せて頂いております。その30年間語られた事の記録を撮らせて頂くということ、実は語り部さんの話を聞くと感想文を書いていただけるのですが、そこに書いてあることを可視化して、その語り部さんの当事者にご覧になって頂いて、実は今お話をされたことはこういう効果があつたんですよということを繰り返しています。かつ、今二人の女性を追っているのですが、その方々の弟子をつくると、これいま僕は落語弟子モデルと言っているのですが、落語は同じ話を長い年月続けておりますが、そういったモデルが今使えるんじゃないかと思って、弟子を育てるということの研究も併せてやっております。以上で自己紹介を終わらせて頂きます。よろしくお願い致します。

福留) ありがとうございます。それでは、同じく東北大学の川島先生、宜しくお願いします。

川島) 東北大学の災害科学国際研究所の川島です。もともと災害の研究者でもなければ、アーカイブの活動家でもありません。ですので、皆さんの様に事業報告ということは出来ないのですが、ただずっと長らくやってきたのは日本民俗学という学問で、生まれ育ったところは気仙沼です。そのために、主に三陸沿岸を中心に、全国の漁師さん達に会って、大体30年位になりますかね、彼らから海の生活文化を学んできたものです。そのために漁師さんですね、自然観ですか、生死観、あるいは災害をどう捉えてきたかということから、災害文化を考えようとしているもので、行政主導の、上から目線の防災に対しては、少し疑問を持っている者です。今回のテーマは、伝承と風化ということですが、実は私も5年前に気仙沼にいて、実家が流されて、身内の者を一人亡くしました。そういった手痛い目にあつた人、あるいは災いをもたらしたはずの海で現在も生活をしなければならぬ人にとっては、風化という言葉は無縁です。むしろ震災を外側から見てきた人、あるいは自然と関わらない生活をしている都市生活者から、風化と言う言葉が出てきている様な気がしてなりません。風化と言う言葉の本質論を考えていかなければならないと思えますが、やはり時間というものが一方向だけに直線的に流れているという捉え方から、風化というものが出てきている様に感じます。ただ、人間の時間の捉え方というのはそれだけではなく、円環的に巡りあってくる時間の流れがあるんですね。例えば自然の四季はサイクルです、一年に一度は訪れる年中行事、それから死者の回帰、そういったものは、その度に過去が思い出される、あるいは去年はどうだったかということが思い出されるわけですが、どちらかと言うと、生活文化や生活環境のレベルでは、円環的な時間の方が根深く、それを直線的な時間に関わらせている様な感じがします。スライドを見てもらいたいのですが、津波の記念碑と津波の供養碑、先ほど佐藤翔輔先生からご紹介もありましたが、記念碑は昭和8年の津波の時に、おそらく初めてだと思うのですが、未来に対してのメッ

セージを与える記念碑が出てきたわけです。これは直進的な時間を想定しておりまして、未来に向けてのメッセージなわけです。それに対して供養碑は、明治の津波の時には記念碑より数は多かったのですが、これは先ほど言いましたように、円環的な時間を想定しておりまして、津波で亡くなった過去の人たちにメッセージを送っている。向き合っている場面が違うわけですね。写真にある気仙沼市にある三ノ浜の津波記念碑に、震災からひと月後に訪れてみたところ、この津波記念碑であるはずのところの下に、栄養剤が二つ供わっていたんです。もはやこれは供養の心なんです。記念碑を供養の心で接しているということです。

次の写真は、今でも行われているものですが、洋野町の八木で、昭和の津波の記念碑の前で、慰霊祭をしているものです。これも1年に1回という循環的な時間の中で、忘れることなく行われているということです。大きな目で見ると、津波のような自然災害の記念碑は三陸沿岸にはずいぶん多いのですが、何年かに一度は巡りくるものという発想をしております。そういった碑の中には、天運循環という言葉が刻まれています。これは60年に1土、同じような災害がやってくるという考え方です。この時間の中で一番大切なのが、供養という行為です。供養がある限り、災害は伝わるだろうと。決して、追悼とか鎮魂とか、大それた言葉ではなくても、個人の苦悩によって、伝承は続けられているだろうということです。時間がありませんので、その他の供養につきましては、次にまわってきたときに話したいと思います。以上です。

福留) ありがとうございます。では、寺島さんお願いいたします。

(寺島) 寺島と申します。河北新報で編集委員をやっております。3月11日以来、ずっと現場の記者として被災地を歩いています。私は福島県の相馬市生まれなので、どうしても去年は福島で被災したまち、南相馬ですとか飯館とかに行ってお取材し、現状と新たな課題等を連載したり、ブログに書いたり、そういったことを続けてきました。もともと東北を長年、文化とか歴史とか生業とかの取材でずっと歩いてきて、川島さんとは、1996年から1997年にかけて行った「こころの伏流水～北の折り」という東北の庶民信仰の連載で、気仙沼の幽霊船についての取材で一緒させてもらいましたし、東北の20世紀をめぐる連載取材でも、唐桑の船乗りたちの生死観と地元の「オカミサン」(巫女)の関わりについて、取材をさせてもらいました。北上の佐藤尚美さんとは、2013年に「We Are One 北上」という活動を取材させてもらい、それ以降、北上町ともご縁を重ねているところです。私は新聞記者なので、被災地の人々の営みにこそ震災の本質が見えるのではないかと、いろんな人に会って取材をしてきました。一方で、震災の風化という問題が深刻に進んでいると思いますが、被災地の内と外を隔たる壁が出来ていると感じます。いかにそういった壁を超える発信をすることが出来るかが課題です。地方紙、地元紙の役割は震災とともに大きく変わったと感じています。地域で生きている人たちの声を外に発信して、風

評を止めることに役立つのではないかと、また、バラバラになってしまった被災者をつなぐ役割も出来るのではないかと感じています。一方でこの5年間、震災の全貌が未だに見えず、新たな課題が山積していますが、それが何だったのか、それまで記録してきたものを通して振り返った時に、具体的な問題や進展が分かるのではないかと感じています。そのために、これまでの記事の集積を、どのように公開、そして共有できるかを検討しているところです。東北大災害研やハーバード大学とアーカイブ作りの提携が進んでいますが、そこから開ける場があると感じています。

福留) 寺島さんありがとうございました。自己紹介を兼ねて、今取り組んでいる事、気になる事を中心にお話頂きました。今日お話を頂いた方の中で特に現場で取り組まれている方は、被災されている方といかに協力しながら、残していくのか、伝えていくのか、が一つのカギなのかなと感じた次第です。そういう意味では私事になりますが、前任地が新潟でありまして、中越地震からの復興においても、いろいろと残していく、伝えていく取り組みは行われていますけれども、被災直後、一年後、三年後、五年後と、時間の経過と共に被災した方自身の見方といえますか、考え方が変わってきたように感じています。特に経験を語るですとか、震災遺構の様にそこで起きたことを含めて残していく事に対して、被災者の方自身の考え方の変化を感じてきました。東日本大震災も来月で5年という時間が経過するわけですが、特に現場で関わっていらっしゃる方から見られて、今取り組まれていることが、取組みはじめた時と、5年が経とうとしている現在では、被災者の方の反応や見方、また関わり方が変わってきているのか、また残していく、伝えていくという視点においては、被災者の方とどのような関係を築いていくことが特に今大事なのか、現場に関わられている佐藤正実さん、藤間さんからお伺い出来ればと思います。

佐藤正実) はい。すごく難しい質問で、答えが出せれば良いなと思いつつ活動をしてきているんですけど、震災直後からの活動と、それから最近の活動で、今出てきた被災者という様な言い方をされましたが、多分、まちなかに居る人は被災者ではなくて、沿岸部に居る人が被災者である、という様な、線を付けてしまうことに問題があるなと思っております。よく中央から、沿岸部の被災者を紹介して下さいというようなことを言われますけれども、「いや、でもまちなかの人も被災者だよな」と思うことがあってですね、やはり震度7を体験したということもありますし、地震がずっとずっと続いていたというあの恐怖感というのは、あれを感じていた人を被災者ではないと線を引きたくないと感じつつ、活動をしているわけです。ただ、沿岸部の津波被災者に関して言えば、だいぶ話がしやすくなってきた状況にはあると感じています。というのも、私どもの活動は、震災後の写真とか被災体験の記録というのは、今はやっていないんです。むしろその前の時代、昭和の時代の写真や、先ほどご覧いただいた様な写真から、生活のお話を聞く、または県外の方にそのお話をさせて頂くということを活動の中心としているので、非常に話をしやす

いテーマでまずは進めてきたということが大きいのかなと感じています。それから先ほど翔輔先生がおっしゃっていた落語の様な師匠と弟子のモデル、それしかないなとも思っているところです。語り部さんとして体験者が語れることは、何年何十年と限られているので、師匠と愛弟子と弟子、二番弟子というんでしょうか、師匠はいつまでも師匠ではなくて、愛弟子が二番弟子、三番弟子を育てていかなければ、たぶん語り継がれることはないんだろうなど。その時のために、一時体験ではない伝え方を今のうちに考えておかなければいけないんだろうなどと考えていました。

福留) どうも有難うございました。藤間さんお願いします。

藤間) はい。まず私たちは、自分の体験を語ってもらう語り部プログラムを、公には2011年の9月の末から始めています。その時に地元の方に喋ってもらえないかと声を掛けにいったのは、私たちの団体の地元のスタッフでした。地元のスタッフの人脈で交渉して、2011年9月前後で、当時10人弱くらいの語り部さんがいらっしゃいました。その後、去年になります、「私にも話させてほしい」という人が事務所を訪ねてきて下さったんです。うちの団体であれば話す場をつくってもらえるんじゃないかと間に入って下さった地元の方がいて、来て下さいました。話せるようになる時期というのは、本当に個人個人で様々なんだなということを感じています。人と防災未来センターに伺った際に語り部さんから「私は7年喋ったことがなかったけれど、7年目で喋れた」というようなお話も聞いていて、何となくそうなのかなと感じていたのですが、去年初めて、喋りたくなると門をたたいて下さった方がいました。また、南浜という住宅が流失してしまったエリアに展示館をつくる時に、最初はあまり感じていなかったんですけど、だんだんと怖くなってきたことをすごく覚えています。そこは非可住エリアで、二度と住宅は建てられないんですけども、そこに真新しいコンテナがオープンの日前に届いた時に、個人的にはものすごい違和感を感じて、その建物を元々住んでいた方が見た時に、何と云ってくるんだろうと、非常に恐怖感を感じたことを覚えています。中の展示をつくる時も、地元の方に相談しながら行いましたが、写真の大きさを決めるときに、大きく展示しようと地元の方から言っただ下さったんですが、いざ大きく印刷をしてみたらその方も衝撃を受けた様で、じゃあもう少し小さく、デザインして展示しようかといったようなこともありました。被災をした人も様々で、先ほど佐藤正実さんから沿岸部と都市部という話もあり、石巻は全体的には沿岸部となるかと思いますが、その中でも流失エリアと、私たちが事務所を構えている様な浸水はしたけれども流失はしていないエリアとでもまた差があったりする中で、やっぱりコミュニケーションといいますか、会話をしていくことが必要なんだと感じていますし、被災者どう関わるかというよりは、個人とどんな風にコミュニケーションをとっていくのかということが大事だと思っています。南浜つなぐ館に関しては、おかげさまでオープンしてから、言葉は変かかもしれませんが、なんでこんなものを作ったんだと怒鳴り込

まれるということは今まで一度もなく、逆に再現模型を見て「自分の家はこんな屋根の色だった」と懐かしく見て下さったり、その時の生活をとめどなく話して下さる人がいたり、そこに震災を知らない外の方が来た時も自然と話をして「私の生活はこうだったのよ、あだったのよ」という話が始まったりですか、そういった様子を見ていると、館をつくったことが完全に正解だったかということとはわかりませんが、一応地元の方々には受け入れて頂けたんだと、今は少し安心をしています。

福留) どうもありがとうございます。佐藤正実さんからは、震災のお話ではなく、震災以前の生活のお話を聞くことが良かったのではないかと、また体験者による語り部には限界があり、一時体験ではない伝え方を考えなければいけない重要性についてもお話頂きました。藤間さんからは、被災者というよりは、個人それぞれどう向き合うかが基本にあるのではないかと、また、そもそも、そういったことを話そうとなる時期や仕方は人によってずいぶん異なるという話も頂きました。先ほど佐藤尚美さんの方から、北上でも、地域によって目に見える物理的な被災の差があるとのことでしたが、佐藤正実さんや藤間さんからあったように、残していこう、伝えていこうというような動きが、全体として直後に比べると出てきているのか、あまり無いものなのか、また差支えなければ尚美さん自身がどう考えているのか、今後は伝える施設に関わる立場として、住民にはどういうところを期待できそうなのか、答えられるところから構いませんので、お話頂けたらと思います。

佐藤尚美) 最初何でしたっけ(笑)。

福留) 同じ地域の中でも、ずいぶん被災に対する感覚や温度差があるとのことでしたが、

佐藤尚美) そうですね。被災者となると、まずは家を流失した人、職場を失った人、津波被害に遭った人、などの分け方になるかと思いますが、昨年一年間、全集落のヒアリング調査をしてきていて、その中で、私自身は沿岸部で、家を流失した方のエリアに入る立場なので、私たちが被災者、そうじゃない人、というのを無意識に、津波被害が無かった集落の人をそういった風に見ているところが無意識にあったんですけど、ヒアリングをしている中で、確かに流失した人たちは大変だった、でも今から新しい集落に生まれ変わって、新しくなっていくよって。私たちの集落はこれからどんどん古くなる一方なんだよね、と取り残された感というのを感じている方々もいて、意識が全く違うということを感じました。まちづくり情報交流館を通した震災の伝承についても、北上地域自体がよそから人が入ってくる地域じゃないので、住民そのものが特に外から来た人に対して話すとか、語り部さんとして取り組まれている人は一人もいないので、観光という文化もさほどなくて、たまたま震災後にフィールドスタディという学生さん達のツアーを個

人的に受けたり、漁師さんが体験ツアーを個人的にやっているという程度だったので、北上の場合どちらかというと、震災の伝承をツールとして使って、被災者や高齢者を含めた住民の役割を作っていくことに私としては目を向けていて、というの、支援されるよりも、支援している方が精神的に元気になれるし、頼るよりも、頼られていることの方が元気になりますし、そういった面で、「皆さん話して下さいよ」と巻き込みながら、逆に元気になってもらおうかなと思っています。

福留) ありがとうございます。現地に関わられている方、かつ現地の人である方からお話を頂きました。急な振りになって恐縮ですが、佐藤翔輔先生にお聞きしてみたいと思いますが、先ほど災害科学というお話をされたかと思います。今ほどの皆さんからのお話を受けて、過去の災害事例であったり、東日本の他の被災地を見ている立場から、また記録を残すという立場からどう捉えるか、お考えがあればお聞かせ頂けますでしょうか。

佐藤翔輔) どうしたら良いでしょうか(笑)。先ほど紹介をさせて頂いた活動は、時間の軸で表現するならば、今の時期だから出来ているということは多分でございます。これを直後にやっていたら、受け入れられていたかどうか、僕なんかは蹴られておしまいだったのではないかと思います。実は、ご紹介した取り組みは、早くも二年半前の取組です。やっぱり四年目五年目で、今だからああいったことが出来ていると思います。先ほどお話が聴きやすくなったと正実さんがおっしゃいましたが、まさにその通りで、今だからお話頂けている、ということは多分にあると。もともと福留先生は阪神淡路大震災で出来た人と防災未来センターで研究をされていて、わたしもそのころから災害の研究をはじめたのですが、当時の先生方がおっしゃっていたのは、「5年目からちゃんとした論文が出てくるんだ」と。5年よりも前に論文を出されている方には大変恐縮ですけども、実は現場でも学術の世界でも、5年というのはそういう時期なのかなという風に、皆様のお話を聞きして思いました。こんな感じで勘弁して頂けますでしょうか。

福留) ありがとうございます。やはり、時間というのが一つ加味しなければならない事柄なのだと思います。そういう意味では、振り返ると二年目とか三年目の頃から、震災遺構についての動きや話があったと思いますが、阪神や新潟中越などの過去の災害と比べるとずいぶん東日本は早いんじゃないかなと当時個人的には感じていたのですが、これだけ大きな災害ですので、国が主体となってそういった事への対応をできていて、結果的に脇坂さんから話のあった国が設置する追悼施設の計画が進んでおり、また市町村ごとにも計画が進んでいたり、施設がオープンしたりしているという状況かと思えます。もし差支えなければ、国として、そういった伝え残すということについて、先ほど何人かの方からお話がありました。時間という中で、国の中での議論の変化について、脇坂さんとして、個人として良いのかわかりませんが、お話し頂けたらと思います。

脇坂) はい。私個人で国の全てを代弁しているわけではないのですが(笑)、復興庁がですね、津波による震災遺構の所在する市町村において、震災遺構の保存を支援するという方針を決めていまして、とりまく課題を整理の上、復興まちづくりとの関連性、維持管理費を含めた適切な費用負担のあり方、住民・関係者間の合意が確認されるものに対して、予算をつけるときにルールをつくらなくてはいけないという議論から、各市町村一箇所まで支援するというルールをつくったわけです。これが妥当かどうかは別の議論だと思うのですが、ようやく市町村も復興のフェーズの中で、震災遺構を残そうという動きや、例えば宮古と田老等の市町村間の連携の動きが出てきているわけです。それは震災の伝承だけではなくて、例えば地域の活性化という視点もあるかと思えますし、市町村ごとの様々な意向があつてよいと感じています。一方で、人と防災未来センターにも行ったのですが、阪神淡路大震災の被災地では、震災遺構があまりないということ自体が問題視されていたということも受けて、伝承のためには一定程度の震災遺構を残さなければいけないということが私の基本的な考え方でして、今回もこういった計画で、今残せるものを残していくことが、結果的に社会にとって良い結果となると思っております。ただ、「こんなものは見せるものでない」「見たくもない」というお考えがある方がいらっしゃることは重々承知しておりますし、一方で、伝承に取り組んでいらっしゃる方々も多くいらっしゃいます。両者のご意見をお聞きしながら、進めていきたいと考えております。

福留) どうもありがとうございます。今脇坂さんから、まずは残すということが大事であって、残されたモノによる伝え方と、と同時に、遺構の上に人を介した伝承や地域活性化等の取組を伴うことによって、より伝えられるのではないかと、というお話を頂きました。遺構や記録で伝える、実際の行事の様な人の取組で伝える、この両面性と言いましようか、それぞれの良し悪しがあるのかもしれませんが、それぞれの持つ特性があると思えます。過去の事例や他の地域の事例において、とくに注目すべき事例等がありましたら、共有を頂きたく思います。川島先生よろしいでしょうか。

川島) それは震災遺構に限らずということでもよろしかったでしょうか。震災遺構については、私は気仙沼市の委員長をやっております、今脇坂さんからお話がありましたが、私から見れば国の対応が遅かったんじゃないかという気がします。気仙沼の場合は共徳丸を解体する事が既に決定していました。それから、市町村に一箇所というの、ちょっとおかしい話で、市町村によっては三か所も必要なところもあれば、ゼロであっても良いはずなんです。そういうところに問題を感じていました。震災遺構を残すということは非常にお金がかかって、イニシャルは国で面倒をみるけれども、あとは市町村で維持するというのも、建物の専門の業者等も入りますから、非常にお金がかかる。むしろ私は、集落の一つ、ここまで浸水したよ、津波が来たよというものでも良いから残した方が、そこに住む人に

とっては非常に伝承になりうると思っています。先ほど話した津波記念碑というものは、ある意味では記念碑ですから人工的につくられた遺構の様なものですが、今回の震災前に意識していた人が何人いるか、ということです。岩手県の場合は過去の災害の浸水線に記念碑が建てており、そのこと自体は特殊な例ではありませんが、ところがそれが忘れられてしまっただけに今に至っている訳です。今回は高台移転をしますよね。陸前高田の長部の例ですが、「あの石碑を高台移転の上に上げたい」という声が出ています。石碑は浸水線に建っているなどの立地が非常に大事でありまして、だけれども日常的に人々の目に触れる機会が無いと忘れ去られてしまう。非常に難しい問題です。大きな震災遺構の問題もそうなんです、あぁいった遺構は今後かさ上げがされて、防潮堤も出来たら海との距離が分からなくなりますよね。あのポイントだけを残そうということではなくて、周りとの位置関係が非常に大事なんです。もう一つ付け加えさせて頂くと、語り部の問題です。皆さんから興味深い話を頂きましたが、みやぎ民話の会という、口承によって、昔話や伝説を集めて伝える活動をしているグループが、半年後に志津川で震災の語りを始めました。それがなぜ出来たかという、そういう人たちは昔から語ってきたからです。先ほど佐藤翔輔さんの語り部の分布図も見ましたが、あの図はやはり、日本の昔話の伝承者の数と同じですね。新潟とか山形では、一人で百話くらい話せるおじいさんおばあさんがいたんです。そういう伝統が、東北にはあるんです。東北は我慢強いとか、無口だというイメージがついていますが、やっぱり喋りたい。私もチリ地震津波に小学校2年生で体験しましたが、東京に行って学生時代を過ごした時に、津波を知らない人に力んで語りました。こういうものだよと。たぶんそういう語りの持つ力というものが、東北には十分備わっている。語りと話しの違いは、語りは相手も巻き込んでいる、話しは一方的なもの。だから、騙すことも語りといえますよね。そのような相槌を伴うものだという事です。だから相手が居て、語りが出る。そういう空間を指しているということです。このようなことが、東北からできる、伝承の仕方ではないかと思っています。

(寺島) 震災遺構の話が出ましたが、いろんな議論があります。例えば大川小学校の付近や北上川沿いを車で走っていると、回りは農地復旧のダンプカーがいっぱい走っていて、土盛り工事をやっています。その風景の中で大川小学校はぼつんと立っていて、そこに町があったことを全く想像出来ない訳です。遺構を一つ残すことが、その地域の人のためにどれだけの、どのような意味があるのかを考える必要があります。防災のために必要なのか、それとも忘れないためのものか。地域の人にとっては暮らしが失われてしまったという喪失感あって、大勢の子どもたちが亡くなった場との向き合い方も様々で、複雑なんだろうと思います。もっと悲惨なのは、原発事故被災地です。私は福島県内の被災地に通っていますが、全住民が避難中の浪江町の人々の大きな仮設住宅が二本松市内にあって、浪江小学校も仮校舎で授業をしています。学校で力を入れているのが、「ふるさとなみえ科」という活動です。いまは戻れない古里には、どういった街があって、どういう人たちがい

て、どんな産業があって、どんな店があったのか、どんな伝統の文化があったのか、などを学びます。避難している仮設住宅にも、その道の名人の方々がいるから、例えば、なみえ焼きそばを作っている方を先生役として勉強し、自分たちも作ってみる、といった活動もしています。つまり反面、浪江という町があるのに、そこを離れている子どもたちにとってはどんどん記憶が薄れていっている状況があって、非常に切ないのです。先ほど石巻市内で人口が減ってしまっている地域の話がありましたが、そこを離れた人たちにとっても、自分の田舎がここだった、自分の家がここだったといっても、そこに何もなければ記憶は薄れていく一方です。建物だけでなく、歴史とか文化とか、そこにあったものが無くなってしまっている。震災から5年経って、戻ることを諦めてそこから去ろうとする人が出てきて、例えば岩手県の沿岸部だと、内陸に避難している人たちの間で、沿岸の古里に戻ろうとする意向の人が2割を切ったという調査結果も出ています。非常に切ないものを感じていたのですが、古里に再び集まろう、消えかけた文化を伝承しよう、という動きも出ています。北上町では、地元で大正時代から伝わる「大室南部神楽」を小学校で伝承していたんですね。ところが、多くの集落と住民が津波で失われた。大室という集落では、津波があった2011年のお盆に避難先から集まった佐藤満利さんから若い世代が、「もういっぺん、来年、神楽をやろう」と話し合ったそうです。それが実現して、翌12年の5月に大室南部神楽の復活祭をやって、それ以後、毎年続けています。満利さんらの子どもたちも参加し、大室の練習場に通っています。そこで再び生きようと思った人たちがいる限り、歴史なり文化なり、記憶は失われないんだと思います。再び集って何かを始めよう、そういう場をつくらうとし、語り始めたり、新しいことをしようとする方は、人の思いにこそあるんだと思います。ちょっと話が長くなりましたが、以上です。

福岡) どうもありがとうございます。それではここまでの話を踏まえて、こういった地域での取り組みや活動の支援をされているみやぎ連携復興センターの佐藤研さんから、お話頂けたらと思います。

佐藤研) 伝えるとか、残すとか、そういった動きがようやく県内各地で出てきたところかと思っています。やっぱり、そこに生きている人たちが考えはじめていて、言い方を変えれば、考えられる余裕が出来てきているということなのかなとも感じます。ただ、それぞれの地域によって時間差があると思いますが、地域を支えようとしている皆さんや私たちが、寄り添いながら、お話を聞きながら、進めていけたらよいのかなと思っています。私は仙台市の宮城野区や若林区に多く関わらせて頂いていますが、地元学という視点を大事にして活動しています。震災前の自分たちの暮らし、震災直後の、そして今までに至るまでの自分たちの生き様や地域が、どういったものであったのかを、地元の皆さんの手で振り返って頂く、検証して頂く取組を進めています。地域の方々の語りを聞き書きして一緒に冊子をつくる、また地域の方々とジオラマをつくるなど、形は様々ですが、その中から、自

分たちの誇りであるとか、歴史であるとかが発見されている様に思います。東日本大震災のメモリアルは3.11からスタートではなくて、その前から始まっていて、ひいては将来のまちづくりにつながる取組だと思っています。仙台の沿岸部では、100年とか、170年とか、そういう周期で大きな津波が来て、400年くらいでものすごく大きな津波が来ているということが、文献で分かっています。先ほどの石碑等の碑がどこまで効果があったのかという話もありましたが、100年や200年後、犠牲者を一人も出さないという自信がある地域にどうすれば出来るか、ということが、残していく、伝えていく活動の神髄ではないかと思っています。

福留) どうもありがとうございました。前半では、現在までの取組のご紹介と、それに関わる、皆さんのお気づきの点を中心にお話頂きました。いくつか後半の議論につながるようなご示唆を頂きましたが、ここで一旦休憩をはさみます。後半は、3.11を伝えるということは、3.11に始まるのではなくて、それより前の暮らしや生業から伝えていく事が大事だ、という話が再三出ておりましたが、震災発生から5年経った今、復興と言いますか、震災直後ではないその後の状況をどの様に伝えていく事が出来るか、また震災を経験していない次世代に、どのように伝えていく事が出来るのか、弟子の話もありましたが、この先の話を中心にお話できればと思います。それでは再開は4時からとさせていただきます。

〔休憩〕

福留) それでは、4時が過ぎましたので、再開したいと思います。休憩に入る前に、次世代に対してどう伝えていくかというお話がありましたが、もう少し広くとらえますと、最初に問題提起として投げかけさせて頂いた、そもそも伝承とか残すということは、どのような目的なのか、またはどのようなことのための手段なのか、これは今日お集まりの方一人一人でも違うことと思います。前半でも少し触れられましたが、改めて今まで取り組んでいる事を通して、目的なのか、手段なのか、伝承するということに対して皆さんがどのようにお考えなのかをお聞き出来ればと思います。それから併せて、前半の終わりの方では、被災した地域の人にとってどうであるかということは議論されたかと思いますが、一方で被災地外、特に川島先生からは風化というのは被災地外の言葉だという指摘がありましたが、被災地外に対してと、被災地内に対しての違い等、何かお考えがあれば含めてお話頂けたらと思います。少し大きな話題となりますが、お話頂けるところからそれぞれお話頂き、出来ましたら後半はお集まり頂いている方同士でやりとりをさせて頂けたらと思います。よろしくお願ひします。

では今触れたような、伝承は目的か手段か、またいわゆる東北の中に対してと外に対しての違い等について、ざっくばらんにお話頂けたらと思います。それでは時計回りで、まず

は佐藤正実さんからお話頂けますでしょうか。

佐藤正実) お話を伺っていて思ったんですけども、記念碑をつくることや、記念誌をつくること、つくって終わりという風になってしまわないかなと思うと、川島先生がおっしゃっていた円環的なのところや、まだ資料にはあるけどお話はされていないところにある供養碑の墨入れについては、前回お話を伺ってなるほどなど。繰り返し繰り返し追体験をしていき、つくったことで終わりとしなないということがすごく大事な事なのではないかなと思いました。

以前、宮崎県延岡にお邪魔させて頂いてお話を聞いて、踊りを見せて頂いたんですが、1662年の外所地震、その時に津波が来たことを踊りの仕草を通して伝えているんですが、それは決してオフィシャルなアーカイブではなくて、どうやって供養で、踊りで、物語で、紙芝居で、フィクションで伝えていくということは、今後すごく大事になってくる時期なんだろうなということを感じていました。何でここでは踊りが使われたのかということを知ること、言い伝えだけではなく伝承の在り方に気づかされることあるのではないかなと思っています。特に震災後は地名がよく取り上げられますけれども、例えばハギという地名ははぎ取られた場所であるとか、先人たちの地名に込めた思いがあったのに、残念ながら震災後に初めて知ったりということが多くて。今後目を向ければ、誰に何を伝えなければならぬのかということ、私自身まだまだ考えなければいけないし、いろんな方々から教えて頂かなければいけないことだと思っています。一つだけ分からないなりに頭の中を横切っているのは、その資料とか体験談というものは、体験者が利活用するものなのか、それとも非体験者が利活用するものなのか、今使うものなのか、今後使うものなのか、ある程度分類しておかないと全部ごっちゃになって、今全部伝えなければならぬという苦しさがあるなあと感じます。一つ例を出すと、例えば先ほど翔輔先生から30年で風化するのを超えたいという話をされていましたが、私は30年で風化するんだと実は思っていて、なので記録するんだと思っているんです。その時に上手く忘れるための記録って必要だと思うし、将来に上手く思い出するための記録なんじゃないかなと。震災後、被災した建物は、見てしまうから辛い、見られるから辛い、じゃあ無くしてしまえば良いんじゃないかというような発想と実は似ているのかもしれませんが、体験者が上手く忘れるための記録も必要ですし、将来非体験者が過去の経験を思い起こすために上手く伝えるための記録も必要だと思います。まとまっていないのですが、以上です。

福留) どうもありがとうございます。脇坂さん、お願いします。

脇坂) はい。私が復興記念公園の仕事に携わって3年経ちましたけれども、両輪ありまして、復興記念公園は市民のためでもあり、県民のためでもあります。とくに石巻はもとの住宅地に立地していますので、私もゼンリンの住宅地図を見ながら仮設住宅を回っ

てお話をお聞きしたりして、地元のために何が出来るかということをしごく考えてきたのですが、国がやる以上ですね、地元のためだけというよりは、外の人、広くいえば日本全体のためにやるんだということでないといけないなと考えています。というのはやっぱり、今回の震災の教訓、何が教訓なのかということもあるんですけども、その教訓を無駄にしないということは国としては大事だと、(音声不明瞭で聞き取れず) 教訓が分かるような場としていく事が、結果的に石巻市民にとっても、外から来る人にとっても良い結果となると考えています。その場を通して、後世に伝えていく、また今後の災害の可能性がある地域に伝えていく、ただまだ 5 年しか経っていないので、伝えていくという現実感はまだ被災地にはない様にも感じていますので、もう少し時間がかかるのではないかなと思っております。

福岡) どうもありがとうございます。続きまして佐藤尚美さんお願いします。

佐藤尚美) 震災の伝承は、個人的には両方で、目的でもあり、手段でもあるんじゃないかと思っていて、私たち住民の立場で見ると、例えば記念碑というお話もありましたけれど、北上で 1,000 万円近くのお金を集めて、それで供養碑を建てようというような話があったんです。それを北上の総合支所に私たちが繋ぐことになり、お話したんですけども、結局市の方はいろんな他の地域、雄勝だったり牡鹿だとかと、足並みを揃えなくちゃいけないということで、他の地域の状況を待ってからとか、で結局テーブルにもつかないで、話も聞いてもらえない。そういった中で、こっちで勝手に区長さんとか住民さんたちに集まって頂いて、皆さんどう思いますかと聞いたんですけど、その中で、北上で被災された方の中には、「うちの息子は南三陸の方に行っていて被災して、どこで亡くなったのか分からない。だから私、どこに行っても手を合わせたら良いのか分からないのよ」という方がいたり、逆に地震の日に地域の外から北上に来ていて北上で亡くなった方もいて、そういった方も北上に来て手を合わせる場所が無い。そういった状況を、もう少し市に理解してもらえんと思っていたんだけど、というようなすごく難しいことが、最近あったんです。なので、記念碑と供養碑の違いはなんとなくは分かっていたんですけど、今日一つ勉強になったし、行政が記念碑をつくらうとするのは、当たり障りのないものだからかなと。でも今の被災地での伝承は、自分たちの集落が無くなったままだから、どうしてもそこで止まっているんです。自分の子どもを守り、子どもにあなたのルーツはここだったんですよ、あなたの生まれた所はここですよ、ということを伝えたいというところにまだ居るんで、なので私たちの活動自体も究極の内向きで、外の人に伝えるというよりは、内側で伝えて内側で共有するという風になっています。

福岡) ありがとうございます。藤間さんお願いします。

藤間) はい。震災伝承を私たちの団体でなぜやっているのかということ、ちょうど一か月くらい前に、団体の中で話し合う時間を設けていました。その時にも自分の思いとして言ったのは、私は、もちろん外の人たちに聞いてほしいということもあるんですけど、第一には語り部さんのためにやっているという言い方はおかしいんですけども、そう考えています。先ほどもご紹介した、やっとな喋るようになったと言って下さった方は「話を真剣に聞いてくれるというその姿勢が、自分にとっての最大のデトックスだった」とおっしゃっていて、本当に日々いろんなことが流されていく気がしている中で、喋ることで自分の頭の中が整理されたり、自分は一人じゃないと思えたりと、傾聴ボランティアにお話をするような効果があるんだというようなことを言っていたんです。時々、「なぜそんなつらいことを話してくれるんですか、申し訳ありません」と言う方もいるんですけども、「そうじゃない」と。あなたたちが傾聴ボランティアの様な事をしてくれるから、こちらこそありがとうございます。そういった会話が実はあるんです。なので私にとっての語り部事業というのは、心の復興と言う言葉がありますけれども、語り部さんの気持ちとか、もう一歩明日も元気に歩いてみようとか、そういう部分を担っているんじゃないかと、今は感じています。

先ほど学校の話がありましたけれども、地域の小学校の総合学習の時間で防災について教えないようになっていますが、小学校の先生たちが、何をどう伝えるか悩んでいるという現状があって、そういったところをうちの団体の元小学校の教頭先生をしていたスタッフがサポートしたりもしています。被災地外と被災地内というところでは、語り部さんには自分と同じ辛い体験をしてほしくないという思いが強い方が多くいらっしゃるんで、今は体験者としてメッセージや体験を伝えて頂くということがすごく大事だと感じています。あまり被災地を特別視するとか、被災者であるということの前に、やはり人であって、同じようなまちで起きうることなんだよと。特別視されてしまうという壁をなるべく低くしたいなと考えています。

福岡) どうも有難うございます。では、佐藤翔輔先生お願いします。

佐藤翔輔) 目的と手段ですけども、私は目的は二つ、それに伴って手段は四つと考えています。目的の二つは、いかに次の災害で亡くなる方や被害を減らすかということが一つであるのと、二つ目は今の被災者に向けてとなりますが、復興や賑わいを回復していくためだと考えています。それをどういった手段で私に関わるかとなると、もちろん私自身は被災者ではありませんし、語り部さんでもないんで、後方支援、バックヤードをさせて頂く立場となります。どんな風にするのかというと、一つはまずこれまでの 5 年前を振り返って、先人たちが取り組んできたことの効果をきちんと明らかにする、ということです。もちろん効果があったこともあったでしょうし、無かったこともあるでしょうから、その線をバツツと引いて、じゃあ次からはこうしよう、皆さんに繋いでいかなければいい

けないと考えています。二つ目の手段は、今被災地でされていることの効果を最大限に高めるということについても、役割があると感じています。先ほど川島先生からもありましたが、既存の学問で得られた使える知見をどんどん現場で使ってもらおうということをやっています。三つ目四つ目は復興の話になりますが、賑わいの創出ですね。これは当事者の方、現場の方には大変恐縮な発言かもしれませんが、核とは言いませんが一つのコンテンツとして、これからのまちの賑わいのために組み込んでいくことです。そしてそれが出来たとしたら、それを続ける、ということが四つ目の手段で、実はまだ答えは無いんですけども、それが先ほどの弟子をつくることであったり、実はこの間久しぶりに中越に行かして頂いたら、震災当時小学生とか中学生だった方が震災伝承のスタッフをされていたりと、そういったことも今後使えるんじゃないかと思っております。以上でございます。

福留) 佐藤翔輔先生、ありがとうございます。それでは、川島先生お願いします。

川島) 目的と手段ということで、事例を二つばかり紹介したいと思います。長崎県の山間部で、安永元年のころの、幕末のころの山津波ですかね。鉄砲水で40名くらい亡くなった地域なんですね。その地域は災害のひと月後から、毎月まんじゅうを配っているというか、本当は供養をしていたんですね。供養の内容と言うのが、念仏とか誂はりをして。まんじゅうというのは、供物なんですね。供物を各一軒ごとに、配って歩いていました。それがどんどん形骸化されて、まんじゅうを配る事だけになっているんです。それでも毎月やっているということは、素晴らしいことなんです、ただそれをですね、防災のためにやっているという、再文脈化によって今注目されているんですが、実は本人たちは逆にびっくりしています。本人としては供養のために毎月やっている事であって、昔の災害を伝えるという意識は特にない。もちろん、今はそうでないかもしれませんが、そういうことって実は大事なんですね。まんじゅうを配ることで、「どうしてこれをもらっているの？」ということでたぶん伝わる可能性がある。意識していないうちに伝わる。日常の生活の中に、災害伝承を組み入れることが、一番自然で、実感を伴って伝えられるということです。次の例は、安政年間の大坂に入った大津波です。碑文には、心ある人は必ず墨を入れよということで、毎年供養に碑に墨を入れているんです。今では市の職員が手伝いに来ているんですけども、ただ、去年は雨が降ったので、作業日がずれてしまった。そういう時は来ないんですね。なので私も手伝ったんです。墨が垂れてしまって、なかなかこれは難しい。原文を見ながら、墨を入れていくわけです。世話をされている方が言っていたのは、「強いられてやってきたんじゃないからね。だから続いているんだ」と。もちろんこれも供養です。地藏盆の日にやって、人々はこれを津波記念碑とか供養碑とか言ってなくて、地藏さんと言っています。既に生活の中に定着していて、供養が一番、震災伝承とか災害伝承の一つの大きな要になるのではないかと、思っているのはそのためです。そういった意味では、伝えることの目的というものはあるんだろうけれども、やはり生活の中の手段にしてい

った方が、たぶん伝わるんだろうと。先ほど佐藤正実さんからの忘れるために記録をするというのは、なかなか良い言葉と思ったんですが、例えば毎日毎日朝起きて、布団を上げているときから防災を考えているという、こういう不幸な生活は無いと思うんですね。やっぱりより良く生きるために伝えていくということですし、もちろん生命第一主義というのも分かるんですが、それだったら三食与えれば良いし、ある意味延命治療にも繋がっていて、防災のために、よりよく生きることが無視されてはならないと思います。それは強調したいと思っております。それから、被災者以外の方の話題が出ましたけれども、一番典型的なのが、私は震災遺構だと思っただけで、他の人に見せるという意味においてですね。気仙沼の共徳丸の場合は、ほったらかして置いておくうちに、人々が集まりました。いつの間にか駐車場が出来て、自販機が立って、最後はコンビニまで出来ました。構わないでいても、これは震災遺構になってしまったものなんです。外から来る人はやはり、ああいったショッキングなものを求めているんだと思うんですね。伝えるという意味では大事なんだけれども、先ほども言ったように、集落の一つ一つで、小さなものでも残しておくことが、結局は次の災害を防ぐ。そのためのものを残しておく必要はあると思っています。震災伝承なのか、復興伝承なのかという問いもありましたけれど、やはり震災前伝承も含めなくてはいけないと思います。それから、佐藤正実さんの説明の中に、震災時の食事がありましたよね。要するに、非日常時の日常も、非常に大事な問題で、そのことにも目を向けていきたいと思っています。最後に、藤間さんから語り部のためにやっているんだと、非常にこれも大事なことで、私は1995年に、まだ今の様にこんなに災害伝承で大騒ぎしない時代ですが、その時代に唐桑で、たまたまなんですが、おぼあちゃんに昭和8年の津波の話をしてもらったんですね。その時帰り際に、「生まれて初めてこのことを語った」と言っていたんです。計算してみたら62年ぶりに、自分の子どもの時の体験を語っていたんです。「何か胸のつかえが下りた」と言われたんですね。そういう伝承の力みたいなものも、考えていきたいと思っております。以上です。

福留) ありがとうございます。それでは、寺島さん宜しくお願いします。

(寺島) 先ほどのお話にもありましたが、そこで残って生き続けようとする人たちに、歴史や文化を再び取り戻す力があると感じています。そこに残っている方たちは、失われたものと今はまだ向き合っているところなんだと、佐藤尚美さんはおっしゃいました。何を誰に伝えるか、震災から何を学んで、どう活かすか。大きなところで見れば、次は首都圏直下型地震だとか、南海トラフだとか、いろいろ危機感と言われながら、政府は東北の震災と原発事故の体験、教訓、学びを活かそうという意思がほとんど感じられない、残念ながらですね。東京に行くと、風化というものを肌で感じます。真空みたいな感じですかね。まだやっつるんですか、と。もう復興したんじゃないですか、と言われる。山梨に避難して、そこで米作りを再び始めた南相馬の農家を取材で訪ねていくんですが、原発事故

などの全く情報が無いそうです。メディアからも入ってこないし、周りの人たちも忘れて
いる。辛かったことを思い出さなくてもいいという点では良いのだけれども、浦島太郎の
ように、自分がどこにいるのか、何をしているのかわからなくなると言っていましたね。
そして、被災地を歩いて同じような事を聞くわけです。川島さんの地元の気仙沼に「南町
築市場」という仮設商店街があるんですが、開設から5年の期限が来て今年秋には閉鎖す
るとのことです。それからの生き直しを迫られているのですが、仮設商店街の人に聞くと、
その市場が出来たころと比べて、団体の観光バス、関西などからの視察の一行もほとんど
来なくなりました。つまり、外から人に来てもらえなければ、語り部さんも語ることが
出来なくなってしまう訳ですね。例えば、被災地ツアーで人を呼ぼうということで、南
三陸町など多くの自治体が企画しましたが、「風化」は、外の人の関心が無くなるというこ
とで、結局この先、どこに行っても見えるのは同じ風景になる。どこに行っても巨大な万
里の長城の様な防潮堤と、土色のまちはばかりになる。北海道の奥尻島の例でいえば、津波
が来て、かなりの巨額の予算を投じて巨大な防潮堤と高台移転を行ったのだけれども、そ
の後、たしか島の人口は半減しているはず。つまり、住民自体がそこを捨てるような
島になってしまったという現実がある。人に来てもらって人に伝えられるのは地元の体験
者だけ。つながりの種というものは、そこに住んでいる人しか持っていないで、さっきご
紹介した北上町の「大室南部神楽」でも、年々お祭りの時には来る人が増えているん
ですね。東京からバイクで来たという人、「また来年来ます」と言って常連さんになる人も
いる。そこでの人のつながりの種が、また次の年に人を呼んで、「去年と変わってないね」とか、
「ああここは変わったね」と、来る毎に変化を感じて、復興が遅いことなどの理由も、人
との語り合いから分かってくる。そういう人がどんどん増えていく事がとても大事だと感
じています。石巻の鮫浦というところでホヤをつくってっている漁師さんがいましてね、
ずっとお付き合いして何度か記事を書いているのですが、ホヤというのは、三年か四年経
たないと成長しないんですね。これはホタテや牡蠣とは全然違うところで、その間じつと
待たなければならぬ。けれど、そのホヤも、震災前が一番の販路は韓国だった。つまり
キムチの材料とか、海鮮料理とかに大変喜ばれて、宮城県産のホヤの7~8割方は韓国に出
荷されていた。けれども、福島第1原発の汚染水から風評被害が広まって、未だに販路を
回復出来ないことが問題となっています。結局ホヤの販路が見つからなくて、漁業者が手
探りで販路を開拓しなければならぬ。その時に鮫浦という小さな漁港―集落などはもう
何もありませんが―彼らは地元の家庭料理である「蒸しホヤ」を作って、長期保存が出来
る真空パックにして販路を開拓し、いろんなところに売ろうとしている。その買い手、広
め手になってくれているのが、震災後ずっと通ってきてくれている、首都圏からのポラン
ティアたちです。彼らがここに来てホヤの味を覚えて、応援をしてくれている。結局人の
つながりなんですね。一人一人のつながりを地道に広げていくことではないかと思っ
ています。

福留) どうもありがとうございます。それでは、ここからは先ほど申し上げました様に、
登壇者の方同士で確認したい事や深めたい事をやりとり出来ればと思うんですけども、
その前に、もし可能でしたらせかくの機会ですので、フロアの方でお聞きになって頂い
ていた方から、今のやり取りに関連して、ご質問ですとか何かありましたら、挙手いた
だけたらと思いますがいかがでしょうか。よろしいですか。またもし何かありましたら、お
声掛け頂けたらと思います。それでは後半、皆様からお話いただきましたけれども、ど
こからでも結構です、目的と手段と言っても、ずいぶん異なるということだけは皆さんそ
れぞれ共有出来たかと思えますけれども、全然違う視点というものもあったかと思えます。そ
れぞれの方から、ぜひ伺いたく思います。佐藤さんいかがでしょうか。

佐藤正実) はい。質問というちょっと違うんですけども、川島先生と、寺島さんと、
脇坂さんの話を聞いてちょっと思ったことなんですけれども、どこも一緒に見えてしま
うま、というお話が出ましたが、実は2013年に私たちの方で取り組ませてもらって、伝
える学校、仙台市の震災メモリアル協働事業なんです、その中で、蒲生と、荒浜と、関
上と、三つのまち沿岸部を、ルートツアーの様な形で、県外からいらした方をご案内す
るツアーを組んでいたんです。その時一番最初に言われて、今でも忘れられないんですけ
れども、更地化されて、草がぼうぼう生えていて、「三つのまちの違いが分からない」とい
う風に言われたんですね。私はもともと仙台生まれ仙台育ちで、蒲生にも荒浜にも子ども
の時から行っていたので、その違いはよく分かっているのですが、「そうか、こういう風にな
ってしまうと、全然分からなくなるんだな」というところが、今3.11オモイデツアーをや
っていることの一つのきっかけで、震災前のまちの様子をご覧いただかないと、まちの
様子って伝わらないということがまず一つと、それから現地の人たちが、震災や震災後
の話はちょっとしにくいんですけども、震災前のまちの様子であったり、お祭りのよう
すであったり、または漁をしている、田植をしている、そういう写真の時は、たくさん話
が出来た。写真と、地域の人たちの思い出を、県外の方々にお見せすることで、やっ
と、蒲生、荒浜、関上の違いがわかる。一番わかりやすいのが貞山堀なんですね。ただ
の堀じゃないか、と思うんですけども、蒲生には蒲生の、いわゆる海運としての貞山堀
の活用があった。荒浜は荒浜で、しじみ漁としての役割があった。そういう三つの
まちに全然違う役割があったということが、写真を見て初めて気付いてもらえる。とい
うことで、その時はすごくガツガツもしたんですが、今から思うと、確かにそうだな、言
ってもらって良かったなど。気付かせて頂いたという意味では、研さんも先ほど仰って
いましたし、川島先生も仰っていましたが、3.11よりも前の様子、そこから歴史が
始まっているんだということを、ちゃんと伝えるべきだなということを思いました。そ
れから、脇坂さんがおっしゃっていた、学びの場であるということが、ほんとそう
だなと思います。仙台市は特に、まちなかと沿岸部で分かれていて、かなり温度差
があると思うんですが、とっくに風化しているのは、仙台のまちなかだと思
うんです。まちなかでは、ほとんど震災の話は

出ない。これでは、風化を助長する一方で、全く学びの場が無いことへの反省をしなければならぬなど思っているんです。仙台市のメモリアルは二拠点構想と言っているのですが、もう一拠点をまちなかにつくると言うんですけれども、それがいつ、つくられるか分からないのを待っているだけでは拍車がかかる一方で、このことを考えるとやはり、誰でも話が出来る、いつでも学べる場を、やっぱりどこかに作っておかなければダメだな。藤間さんの報告にもあったちゃんとした施設、集まってきて皆で話が出来るとあるということが、すごく羨ましいし、そういう場であるべきだなということを感じました。質問ではなく、感想でした。ありがとうございます。

福留) 今を受けて、どなたかいかがでしょうか。脇坂さんお願いします。

脇坂) 脇坂です。今話を聞いて、佐藤さんに聞きたいんですけど、荒井に駅が出来て、センターが出来たじゃないですか。私は完成した直後に行ったのですが、まだ一階の展示しか出来ていなかったの、一階を見て二階はまだ上がっていないんですが、河北新報によると、市議会議員からクレームが来たという記事が出ていましたよね。全部を見ていないので分からないのですが、あそこに行くと、確かに荒井の周りには災害公営住宅が出来ていて、被災された方々もお住まいになっていると思うんですが、被災地からは遠くて、被災地という実感がわきにくいのかなという感じを受けました。逆に言うと、みらいサポートさんのつくった南浜のつなぐ館はすごくわかりやすく、そういう施設ってどこにたついても良いわけではないんじゃないか、という気がちょっとしているのですが、その辺りどうなんでしょうか。(苦笑い)

佐藤正実) それ、私が答えるんですかね(苦笑い)。いやーこれ、公式記録に残るとねえ。答えにくいってありやしないんですけども、一度ご覧になると良いと思います。多分、いろんな思いがある施設だとは思いますが、課題もあると思います。ただやっぱり、二拠点構想と言った時に白羽の矢が立ったのは、荒井駅が新設され、そこに場所があるからメモリアル施設をつくらうということになったんだと思いますし、まだ出来たばかりですので、きちんと運用されていくのはこれからだと思います。ただ、場所的に言うと、まさにその通りだと思います。これから荒浜に限らず南蒲生など、仙台市で買上げた場所を、どう活用するかというアイデア募集を新年度から始め、その土地を仙台市が安く貸出し、人が集い、交流を深める場所をしよう、ということになったらいいですが、むしろ、荒浜小学校の近辺にそういった場所が出来れば、建物は簡単なものでも良いから、コンテンツがしっかりしたもので、地元の人たちが関われる場を作ればよいと思います。公募制でも良いから、いくらでこういったものを作ります、が出来ると、良い様な気がします。ぜひ一度、ご覧ください。

川島) 今荒浜の話が出て、いろいろ思い出したんですが、まだ荒浜には漁師さんがいて、そこで漁業の営みをしているわけですね。船は蒲生の方にあるんですけども。私は震災の年の8月20日に盆の行事、灯笼流しに行った時に、もちろん住宅は無いんですけども、そこに住んでいた人々が供養にということで、皆盆船とか集まって流そうとしていたんです。そこに警察が来て、それを止めようとしているのを見た時に、やはり海と人の生活というのは切り離せないのに、むりくりに切り離そうとしている、これは良くないことではないかと感じたんです。それはさっきも言ったように、生命第一からそうなんですけれども、西洋の場合は死んだ人というのは天国にいってしまうけれども、日本の場合は魂としてその場所に残るんですね。だから交通事故があった場合で供養したりする場面を見かける訳ですけども、やはりその場に残るんですね。なぜ三陸の人々が、津波常習地と言われている所に戻ってくるのか。いろいろ経済的な問題とかありますけれども、海を離れられない何かがあるんですね、やっぱり。それは供養していることも大きいですし、そういうところを見ないと、防潮堤は作るけれども、もう守るべき家も人も居なくなったという状況にいずれなると思います。憩座を作って海が見えるという問題ではないと思うので、その辺をちゃんとやってもらいたいとは思っています。

福留) ありがとうございます。寺島さんお願いします。

(寺島) 私も「荒浜つながり」なんですけど、荒浜の若い方々がやっているそうなんですけど、被災地になった荒浜そのものが生きた「記憶の図書館」であるという考えのもと、自然であるとか、震災以前の歴史、文化とかを一冊一冊の「蔵書」と捉えて、来る人たちに伝えている、そういった活動があるそうです。誰でもそこに来れば参加できるとのこと、まだあまり知られていない様ですが、こうした取組が自然に広がり、子どもも含めて、人が自然と集まっていく場になると良いなと思います。一種のスタディツアーですね。

福留) 関連したご発言などあればと思いますがいかがでしょうか。佐藤研さんいかがでしょうか。

佐藤研) 場づくりですけども、仙台のメモリアル交流館の話で言いますと、私もあの場をつくる時に「地元の人にわかりやすく伝えてほしい」と言われて協力した経緯があります。地元の人が愛して関わってくれる場にしていくことが、一番大切なんじゃないかなと思っています。いくら立派なハコをつくってもそこで語りかけてくれる地元の方が居なければ、とても無機質で、そこで何が伝わるんだろうかと。メモリアル交流館の関係者には、地元の人が語り部として最初に居なくてもいいじゃないかと、伝えていました。周辺は農業が盛んな地域ですが、そこでお茶出して、自分で作った漬物を出して、自分でつくった野菜を売る、野菜の直売所で良いじゃないかと。まずは、地元の人に居てもらえるよう

な施設でいいじゃないかと。そこから、会話が生まれて、一つずつ語り出せる様になればいいじゃないかと、そんな風に思っています。これから北上の方でもつくると思うんですけども、つくだ煮出したり、魚売ったりと、あまり大上段に構えない場からはじまってもいいんじゃないかと思っています。

福留) 今のを踏まえて、藤間さん、先ほど三館の資料館のネットワークの話もさされていましたが、補足頂けたらと思いがいかでしょうか。

藤間) はい。私たちは資料館ではなく伝承スペースという言い方をしているのですが、駅から徒歩10分くらいの街中に二つと南浜という全線エリアに伝承スペースを持っています。街中の方は私たちが運営する伝承スペース以外に新聞社が運営している館と、市がつくった情報交流館があり、全部徒歩2・3分の所にあります。大きな修学旅行を引き受けたりする場合に、各館ともにそんなに大きいわけではないので、一館では引き受けられないんですね。なのでそういった場合に、2・30人ずつくらいに分けて回ってもらうなど、そういった形での連携を、私がやっている仕事の中ではしたりしています。先ほどからの南浜つなぐ館の話もしていただいて、本当にありがたいのですが、私たちは南浜つなぐ館は、週末土日と、祝日しか開けられていないんです。私たちのマンパワー不足が最大の理由なんですけど、ただすごく嬉しかったことがあって、地元の家があった方々から、「もうちょっと開けてくれよ。俺たち手伝うから」と言っていたんですね。毎日はもちろん来れないけれど、週に1日の午前中だったら開けてあげよという様なことを言いに来てくれたりとかしてくれるんです。語り部さんが言って下さることもあれば、館に来てくれた方が言って下さったりだとかして。4年後に復興記念公園が出来れば、必ず何か伝えるための館が出来るはずなんです。その時になって初めて地域の人たちに、来館者への対応へのレクチャーなどがはじまっても、きっとすぐに出来る様になるには難しく、私たちの館が今からそうやっていいよと言ってくれる人たちを巻き込みながら、4年後に出来た時に、スムーズに対応出来る様になっているなど、そんな風につながっていったらいいなって思っています。それとともに、私たちの館にお越し頂いた方の中で、「自分たちのまちの思い出を書けるようにしてほしい」と言って下さった地域の方がいて、どうやったらそういう展示が出来るか、私たちも分からなかったんですけど、とりあえずは航空写真を壁に貼って、付箋を置いて、自分たちのまちの思い出を書けるスペースをつくったんですね。そうしたら付箋に「このチーズケーキは最高に美味しかった」といったコメントが書かれて、またその付箋に対して「私そこに震災前まで勤めていました」というコメントも張られて、その場にお二人はいないんですけども、付箋で会話が繋がっている状況が生まれました。佐藤正実さんからお聞きしていた、付箋の中で会話がされるということが、実際自分たちの取組の中でも起きていて、面白いなあと感じていました。やっぱり館にはなぜここにこういった館があるのかということ丁寧の説明する人が必要で、ただ模型があ

って、ここに家があったという物理的なことが分かるだけではなくて、ちゃんとみなさんと同じ、スーパーがここにある、ケーキ屋さんがここにある、バッティングセンターがあつてとか、本当に普通のまちがあったんだということ、まちや生活の匂いが感じられる展示が出来る様、四年後に向けてためながら活動をしていきたいなと思っています。

福留) どうもありがとうございます。藤間さんから、南浜つなぐ館などではじめている活動が、将来的に国営公園などで整備される施設などにつながっていったら良いというお話がありましたが、もし良ければ脇坂さん個人として、整備する側としては、どういう公園になっていくことが望ましいのか、これはあくまでも個人の思いで構いませんので、そのあたり教えて頂けたらと思います。

脇坂) はい。立場でということになるんだと思いますが、今南浜つなぐ館があつて、がんばろう石巻の看板等もあつたりするんですが、市民の方々と、みらいサポートさんの様な外から来たNPOの方々とが一緒になって今回の震災を伝えていきたいとは思っています。工事している中でも出来るだけ柔軟に取り組んで、こういった伝承活動を繋げて言って、完成時点で出来た施設にずっと行ける様にしたいと思っております。公園をつくるのが私の任務ではあるんですけども、つくった公園が機能するという視点に立てば、そこで伝える人と言うのはどうしても必要となってくるんですね。ですからそういった人が伝えやすいように、公園の設計も、例えば町割構造を残してここが何丁目何番地だったかわかる様にしようとか、池をつくるにしてもここは震災以前は水田だったんだよと言えるようにするんですとか、あとは震災の様子をそのまま残して、震災後はこのような状況だったんだよと言えるように公園をつくって、かつそういった拠点施設もつくり、サポートしていけるような場にしていきたいと考えております。石巻にかぎらず他の所もそうだと思うんですが、それぞれに頑張る必要があつて、私は私なりに、石巻と陸前高田で頑張っていたらと思っております。

福留) どうもありがとうございます。あともしよろしければ、尚美さんの方からこれから石巻のまちづくり交流館を運営していくという話が冒頭あつたかと思いますが、今ほどのいろんな館や語り部の取組を聞かれた中で、これは今後のヒントになりえるなど感じられたことがあればということと、尚美さん個人としてこういう風にやっていきたいと思つているところがあればお話し頂けたらと思います。

佐藤尚美) はい。今日は私自身はすごく勉強になりました。得るものが多くあつたと思います。と言うのは、まちづくり交流館を受託することがつい最近決まって、でも結構ぎりぎりまで「これって北上に必要ですか」というところで私の中で戻っていたんですね。市の方でもどういったことを目指して、どういった運営を行っていくのかもずっと計れな

いままでいましたし、北上、牡鹿、雄勝、石巻中心部と、石巻市の中で4つできるものの、つながりというものが全くなく、市の計画では今後も無さそうなんですけど、同じ様なものを4つつくったところで、何が意味あんのかなと。で、私たちは去年の年末、新潟のメモリアル施設を住民の人たちで視察に行つて、それぞれきちんとストーリー化されていて、「ほらおもしろい」と思つて。そして総合支所に行つて、「私たち見てきたよ。すごく良かったよ。本当はこうするべきだよ。私たちに委託する前に、自分達も見ろべきだよ」というやりとりがあつて、市の方が後で追っかけて見に行くという事があつて。話を戻すと、20世紀アーカイブ仙台の佐藤さんのはじまりのごはんの取組の、非日常の中の日常が、私たちが新潟に行った時に、そこに一番ビツときて。というのは、まったく知らない地域、知らない集落に行つて、ここで何名もの方が無くなって、集落が消滅しましたと言われても、あまりリアリティがなかったんですけど、新潟の場合は住民さんの証言が強調されていて、そういったところがすごくリアリティがあつた。うちの方もそうやりたいなと思つてはいたけど、どう表現するかはぼんやりしてはいたんですけど、佐藤翔輔さんのお話の中での津波伝承地メディア、この言葉は今日初めて聞いたんですけど、あら、これならできると思つて（笑）。北上だと浜が13あるから十三浜という地名になっていて、一個一個浜の名前があつてとか、伝統文化も、こういうものを津波の伝承メディアとして捉えるという考え方が今まで無かつたので、これは目から鱗だったんです。これは使えるなと思つていながら、妄想をはじめようかなと思つていて。あと生活の中の一つにした方が伝わるという川島さんの話も、これはそのまままちづくり交流館の中に活かしていけるなど。あと、こういった討論を、本当は市の人たちがまちづくり交流館の計画をする前にしてくれたら、こんなに、これだけの議論がここでなされるのに、結局今回の交流館にしても、これまで伝承活動を担ってきたのは、外から入ってきたNPO等といわれる人たちによってずいぶん行われてきているんですね。そしてその後まちづくり交流館をつくらうとなつたのであれば、上手くその人たちの持つ技術や知識を活かすという協働の部分が完全に欠けていて、今日の討論をやればやるほど、逆に市に対して腹立たしい思いをまたムツツツと思ひ出しながら、今日は帰ります（笑）。ありがとうございました。

福留) どうもありがとうございます。いろいろとあの、出ましたけれども、もし他の皆様からも何かあれば。

佐藤正実) 川島先生に質問なんですけれど、伝えるというのは、人が云うで伝えるだと思つていますが、全国の、川島先生の知っている範囲で結構なんですけど、上手く伝わっている事例はどういうものがある、何をやっているからなのかというところを教えてくださいなと思います。

川島) 先ほども紹介した、年中行事の中で組み込まれている取り組みが、災害伝承の中

で一番根強いし自然だと感じますね。供養という言葉を使ったのですが、大正橋の例でいうと、これは橋のたもとにあるんですね。北側になるのかな。実は南側にはこういった供養塔が無くて、実は10年位前にそこを開発するための工事に来ていた人が、毎晩白い着物を着た人が川から上がるのを見て酔めていく人が多かつたんです。地蔵様を祭っている側は、だからこっちでは見えないんだね、という言い方をしているんですね。津波で亡くなった人の幽霊だ、ということは確かですよ。そういった形で伝わっている方が、実に生活感覚としてはすんなり入ってくる。いろいろモニュメントや公園は出来るんだけれども、追悼、鎮魂の場をどこかで設けないと、単なる記憶をとどめるだけに終わってしまう。やはり災害ということ伝えるには、本当に幽霊話でも伝わるわけですから、何かそういった生活感覚でとらえるもので、動かしていくしかないのかな、と私個人としては思っております。

佐藤翔輔) 川島先生の後で言うのも恐縮なんですけれども、川島先生が長崎のスライドを説明されましたが、一個仰つていないことがあるので言います。むちゃくちゃ大事なことで、長崎の念仏講まんじゅうの例で大事なものは、実は二回災害が来たということなんです。念仏講まんじゅうが始まったのは、1860年の土砂災害なんですけれども、この後1982年にもう一回土砂災害が起きるんですね。その時に、けが人が無かつたということが、大事な話なんです。隣の町では、犠牲者も出てしまったと。この事がこの事例の一番大事な話ですが、先生にお話を聞くと、念仏講まんじゅうをやっている人は災害のことを知らないということなので、不思議だなあと、今そのメカニズムが知りたいなあと思っております。

福留) ありがとうございます。その他いかがでしょうか。よろしかったでしょうか。

佐藤尚美) すみません聞きもらしたんですけど、さつき翔輔さんが津波伝承地メディアの効果を研究中と仰つていたんですけど、これはいつまで研究して、答えはいつ見えるんでしょうか。

佐藤翔輔) はい。一応構想としては三段階で三年でやっているんですけど、一年目は終わりました。一年目の答えというのは、あつたかもしれないということとして、昨年の秋に発表しているのですが、あくまで統計データで、メカニズムまではまだわかっていないのですが、もし同じ津波のインパクトがあつた場所が二つあつたとしたら、その二つの場所で片一方の場所で碑があつて、もう片一方の場所で碑が無かつたとしたら、碑があつた方が、若干、津波で亡くなった人数が少ないです、ということが統計的に出てきたんですね。今、何でそうなのかなということ調べているので、それを報告できるのは再来年くらいとなるかと思いますが、併せて報告をさせて頂けたらと思います。

佐藤尚美) 再来年ですか。

佐藤翔輔) はい。いや、なんか、尚美さん怖いですね(笑)。再来年を目指して頑張っております。

福留) では、そろそろ時間が近づいておりますが、これまでの議論をお聴きになって、その他の方からご発言ありますでしょうか。脇坂さんお願いいたします。

脇坂) 震災伝承はとても大事な事なんです、ここにいる公務員は私国土交通省の公園づくり担当ですけれども、本来的には県とか市とか、教育委員会とかですね、他にもいっぱいあるはずなんです。多分、震災伝承が仕事だと言える公務員がいないということが、先ほど石巻市の話もありましたけれど、難しい所なんではないかなあと気がしております。震災伝承もちょっと担当しています、という公務員はたぶんたくさんいらっしゃると思うんですが、それがメインの業務ではないという状況において、いろいろ不満等があるのではないかと思います。それは行政も相当悪いところはもちろんあるのだと思いますけれども、行政も人なので、こういったことが大事であると個人で思ってもらって、一生懸命取り組んでもらうということが大事ではないかと、個人的には思っております。ということで私もこの仕事をしていて、一緒にやっている石巻市の担当の方とは熱い思いでやっておりますので、引き続き関わっていきたくと思います。

福留) どうもありがとうございます。佐藤研さん、いかがでしょうか。

佐藤研) はい。長時間いろんなご意見を頂き、自分としても非常に参考になりました。震災伝承、メモリアル、一口に言いますが、東北にとってはこれから非常にスパンの長い取り組みになると感じています。伝承の目的や、携わる方々のモチベーションなど、これから試されることも多いと感じました。今日の場の様な、宮城県内の震災伝承やメモリアルに携わられている方々の情報交換、意見交換等を行う連携やネットワークなどを今後出来ることからつくっていったら良いなと思いますし、将来的には宮城だけではなく東北全体のネットワークが出来て、それぞれの地域の先につながる展開を生み出せたらなあと、そんな風に感じました。

福留) どうもありがとうございました。それでは、司会の不手際で話がやや広がってしまい、まとめる力もございませんので、今日のこの場はここまでとしたいと思います。まだ、話し切れていない部分、個人的に確認をしたいということもあろうかと思っておりますので、この後の時間をご活用頂いて、ぜひこれをきっかけに、それぞれの皆さんの取組が今以上

に円滑にいくようになれば、今日の場合は良かったのではないかと感じております。長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

【全体共有】

福留) では、テーブルCについて、簡単に振り返りをしたいと思います。最初に自己紹介を兼ねて、現在の取組ということで、国の方で整備を勧めつつある国営公園、それから石巻、そして仙台の取組がまず紹介されました。その中で語り部の方の活動についての話題がかなり出てきたんですけれども、そういった地元で協力してくれる方をいかに増やしていくのかということが、こういった伝承においては一つの大きなカギになると。ただそれについては、やはり直後と、5年経つ今とでは、時間の中での変化があるということと、個人によって伝承との向き合い方の差があるので、なかなか一概には言えないし、今だからこそ出来ることもあるという話もありました。と併せてですね、よく被災者か非被災者か、被災地か被災地で無いか、という様な線引きがなされる場合があるけれども、決してそれは語り部に代表される伝承の様な、記録として残すという時には、決して被災者か被災者でないか、被災地化被災地で無いか、という狭い意味ではなくて、あくまでも個人として向き合う中で、何を語るか、何を残していくか、という関係性を築いていく事こそが、伝承においては大事である、ということがお話として最初に出ました。

その後、残し方、伝え方として出たのが、これは川島先生からだったかと思いますが、風化と言うのは、少なくとも被災地内ではなく、被災地の外の話が風化であると。風化という言葉が今回のテーマにも出ているものの、結局外に向けてどうかというところで風化という言葉は扱われるべきだという問題提起がなされました。と同時に、残していく事を内側で、地元側で考えていった際に、過去の例や岩手県のお話の中から、碑などは、人目に触れるということを重んじるのか、それとも、そこまで津波が来たという当時の立てた場所ということを重んじるのか、どちらかということとは決めづらけれども、伝えるという時に、どこに重きを置くかということは、これから考える問題であろうという話がありました。

そういう議論を踏まえ、後半は震災伝承の目的や手段、というところに移ってまいりました。そもそもこういった伝承は、被災地外への話、そういう意味では脇坂さんから出たのは、学びの場としての伝承、それから伝承の場が必要ではないかというお話がありました。一方で、今の地元にとっては、伝承と言っても碑に代表されるように、鎮魂や追悼という目的も現実にはあろうだろうと。そういった意味ではまだ、今回の東日本大震災の中では、まず鎮魂や追悼という意味での伝承がなされなければ、次には進まないのではないかと、そういう話がありました。外について伝えることと、中に向けて残していく事が、今はまだ異なる

る部分がある、先ほどの外に向けての学びの場ということであれば、もう既に遅れており、学びの場をしっかりとつくっていかなければいけないということがある一方で、地元にとっては追悼する場、鎮魂する場をつくっていけないと次には進めない、この二つの意見が出ました。学びの場としては、ある方から出たのは、外向きに学びの場をつくっていくのであれば、震災遺構の様に、すぐ見て津波の衝撃が伝わるが必要であるという意見が出た一方で、もう一つ出たのは実は今の被災地の多くがどこを見ても同じ光景が広がっていると。そういう意味では、震災前の暮らしなり生業なり、前がどうだったかということに伴って伝えていかないと伝わらない、というお話がございました。ですので、そういう意味では、モノだけで伝えられることは限界があり、そこに語り部など、人が伴って初めて伝承と言うものが成り立つのではないかと。伝承について地元の人が集まるためには、集まるためのモノが必要だということで、話の中では、震災前に合ったような歴史や文化、例としては神楽の様なもの、そういったものを再開していくことが、地元の人にとってはそこに戻り、前に進むきっかけとなり、それが伝承につながる、というお話がありました。中長期的に見た時にもう一つ大事な視点としては、いかに日常の中に伝承を含めていくかということで、一つには仙台では取り組みが始まっているそうですけれども、非日常の中で日常を伝えていく、言い方をえますと、一つには震災直後の3月12日に最初に食べたごはんは何だったか、ということ伝えていく試みがなされているそうです。そういう意味では、多くの人の関心を持ってもらうということは必要なんですけれども、被害の経験者以外の人にとっては自分の日常に置き換えた時に何が起きるのか、ということを知ってもらうということが、中長期的には大事ではないかと。それともう一つは、ずっと追悼、鎮魂という形で、自然に伝えていく事が、結果として長く伝わることになるのではないかと。というご指摘がございました。そういったところでお話が出た後、最後は進行形の問題ですけれども、伝承をきちんと仕事として取り組める人を増やしていく、それは語り部さんなどもそうですが、今整備を進めている行政関係者の中でも、なかなかそれが自分の部署の正面の業務であるという認識をしてもらえないことが、この議論が進みにくい原因の一つであるのかなと話が出ました。その上で、部署はともかくとってしまうと怒られますけれども、それぞれ向き合う人が、自分の思いを交わす中で、こういうことにしっかり携わっていく事が、伝承につながるんだということを意識した上で取り組んでいく事が、伝承につながっていくという話が出ました。駆け足ですけれども、テーブルCからは以上です。